

遠洋

水産研究所ニュース
昭和 52 年 4 月

No. 27

— ◇ 目 次 ◇ —

日本のアザラシ産業の紹介.....	1
大西洋からのシロカジキ <i>Makaira indica</i> の漁獲記録.....	8
クロニカ.....	8
刊行物ニュース.....	11
人事のうごき.....	12
それでも地球は動いている (編集後記).....	12

日本のアザラシ産業の紹介

1 はじめに

南極アザラシ保存のための条約の締結 (1959.12.1) が引き金となり、近年、海産哺乳動物に対する保護運動が米国を中心として、とみに活発化している。北半球のアザラシについても資源保護に関する動きがみられ、情報交換の国際的な場として、1970年以降のおととせ国際会議の後に、かなりの量の情報交換が米ソの間でおこなわれてきた。これは「ベーリング海およびチュクチ海におけるアザラシ並びにセイウチに関する非公式会合」と呼ばれ、これらの海に面して領土を持つ米ソ2カ国間の同意にもとづいて始められた会合である。

日本とカナダは例年オブザーバーとしてこの会合に出席し、推移を見守ってきた。この会合はアザラシ類の資源の保護のために、やがては国際的な条約を締結するための手段の開拓を目的としたものである。

我が国においても小規模とは言うものの、アザラシ漁業が存在する以上、上記のような鯨脚類に対する国際情勢並びに海洋法の問題等を考慮し、従来のように、野放し状態で放置することなく、国が行政的並びに研究的にいかに対処すべきかを考えざるをえない時期に到ったと思われる。

近い将来起り得るであろうアザラシ類の条約問題に

国際的な考慮から孤立することなく、我が国の方針設定に多少とも参考になればと 考えてこの 紹介文を作製した。

この漁業は漁業法に制約されない自由漁業であり、操業に必要な火薬類の購入は「鳥獣保護及び狩猟に関する法律」の適用範囲外の有害海獣駆除である。したがって日本におけるアザラシ漁業は野放しの状態と言っても過言ではなからう。

自由漁業であり、かつローカルのものゆえ、その操業形態、捕獲種、捕獲量並びにその用途については多少の紹介文はあるにしても、ほとんど知られていないのが実情である。

私の属する研究室でも折をみて統計資料を集めてはいるものの、捕獲数並びにその種類については毛皮加工業者の手で加工された枚数から推測せざるをえない曖昧さがある。

ここに紹介する内容は、現にアザラシ漁業経営者 (波田一幸氏)、アザラシ毛皮加工業者 (鈴木安太郎氏)、日魯毛皮KK、木下商事KK、小林桂KK、北見統計調査事務所紋別支所から得た資料並びに内藤靖彦氏の「アザラシ漁業の紹介」及び哺乳類研究グループ海獣談話会発行の「ゼニガタアザラシの現状と保護に関する見解」を参考として整理したものである。

2 日本のアザラシ漁業の歴史

日本におけるアザラシ漁業の歴史はあたらしい。主と

してオホーツク海及び北海道東部沿岸海域で小規模ではあるが戦後樺太からの引き揚げ者が主となり、会社組織（オホーツク海獣KK、新日本海獣KK等）として始められ、経営者の交替はあるものの次第に規模を拡大しながら現在に至っている。

戦後、国内の食糧難事情により肉油の需要が高く、昭和21年～昭和23年にかけては5～15トンの船5隻がオホーツク海近海並びに根室海域で操業した。昭和24年には35トン型の船も操業に加わり、一時の隆盛を見た。

昭和27年頃からは国内の食糧事情も次第に安定し、肉、油を目的としたアザラシ漁業は衰退の一途をたどる結果となった。

昭和35年頃からはアザラシ毛皮個々の美しい斑紋を利用した民芸品及び袋物として再登場し、昭和40年頃から本格的生産態勢に入った。

これらの製品はローカル的なものではあるが、現在もかなりねづよい需要があり、年間約5,000頭分の毛皮が原料として必要とされている。現在では外国産のナメシ原皮も輸入している状態である。

この原料確保のため、操業船も大型化し、操業海域も拡大されつつある。根室海峡海域での操業船（1～5トン）は別として、1975年オホーツク海域では96トン型の鋼船が3隻4月～7月の間操業し、1976年には96トン型が2隻操業している。

3 時期別操業海域と操業方法

操業海域は主として3つの海域に大別できる。

(1) 北見大和堆から樺太東岸沿いの北緯56°にいたる流氷期のオホーツク海漁場。操業期間はその年の流氷状態によって多少の差はあるが、平均して4月上旬から6月下旬にかけて図一1の海域で流氷を追いつながら北上して操業をおこない、流氷の消失とともに終る。

操業方法は母船式（96トン型鋼船）で、2～4隻の捕獲艇（全長約6m前後の磯舟に船外機を着装）を搭載している。

操業は流氷探索から始められ、流氷を発見すると、上記の捕獲艇を降下し、主としてこの艇にて氷上のアザラシを捕獲する。捕獲艇はハンター1名と舵取り1名で構成されている。ガス及び流氷等の危険海域のため捕獲船の動行監視は目視、トランシーバー及び方探を用いて常に母船側でおこないつつ操業が続けられる。

氷上での捕獲はアザラシにできるかぎり接近できる技術を持つハンターが上手とされており、捕獲量

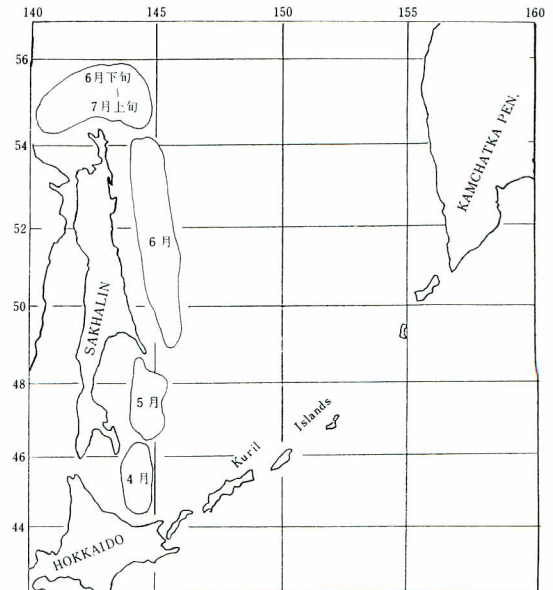


図1 流氷期（4月～7月）アザラシ月別操業海域

の差は、接近技術の差にあると言っても過言ではない。約50～100mの距離からライフル銃（30.00、30.06、30.68口径）で射殺する。

この時期はアザラシが氷上にあがっているため、游泳中のものにくらべると捕獲はしやすいが、4月下旬から5月にかけては換毛期のため毛皮品質の悪いのが多くなる。したがって、この時期に2～3週間休業する船もある。

沈下及び逃走率は氷上射で10%、水中射で60～70%の高率を示す。特に水中射で沈下率が高い理由はこの時期にもっとも脂肪層が薄いためである。捕獲種は、ゴマフアザラシ、クラカケアザラシ、ワモンアザラシ、アゴヒゲアザラシの4種である。

(2) オホーツク沿岸と根室海峡海域（サロマ湖、尾岱沼の内水面も含む）

2月～4月にかけての流氷期と、8月～1月にかけての秋期の水射ちとに区別できる。

① 流氷期の操業海域と近年の種別捕獲数は図一2に示す。

一部の漁業者が、流氷の浸入する閑漁期に副業として操業する。したがって、流氷期のオホーツク海での操業船と比較すると出漁船数は多いが、2～3トンの小型船のみで、乗組員も2～3名である。知床半島羅臼町より知床別に至る各港から出港して、ほとんど日帰り操業である。操業方法

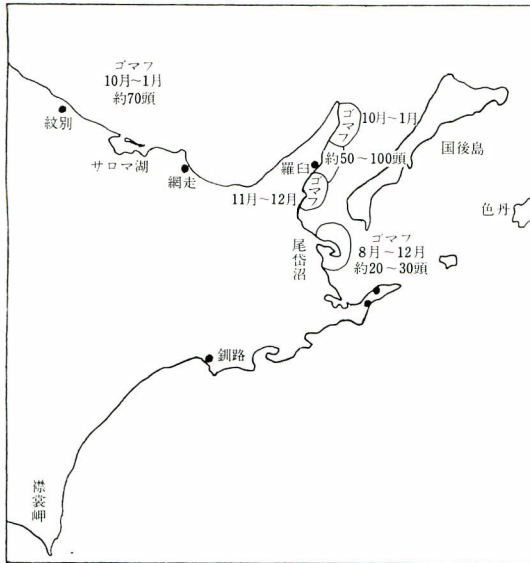


図2 流氷期沿岸(2月~4月)アザラシ
操業海域と捕獲数

はオホーツク海域での流氷を追って操業するという方法ではなく、根室海峡に流氷が浸入したときのみに出漁する。

操業時期はその年の流氷の浸入状況により毎年異なるが、平均2月中旬から4月下旬である。

捕獲方法は、水中を泳いでいるものを撃つ機会

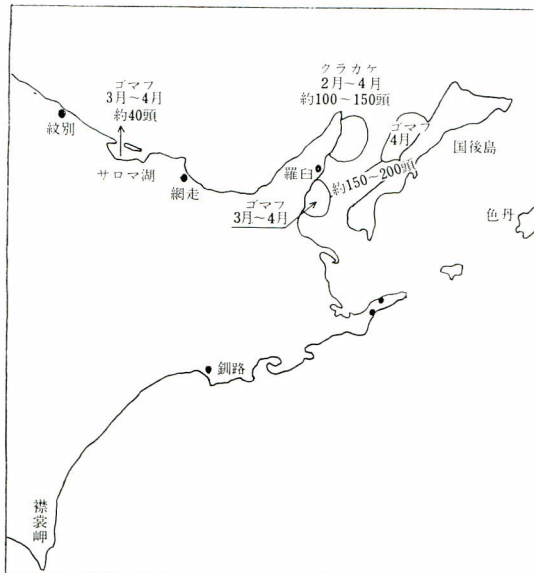


図3 秋期水射ち(8月~1月)の
操業海域と捕獲数

が多いため、銃は散弾銃が多く使用されている。捕獲種はゴマフアザラシとクラカケアザラシの2種である。

② 秋期の水射ちの操業海域と捕獲数は図-3に示す。

流氷時期以外の操業で時期は8月~1月の間であり、船外機着装の6m程度の小船でおこなわれる。捕獲方法は全て散弾銃が使用されている。

捕獲種はゴマフアザラシのみである。この時期は毛皮品質も良く、最も脂肪層が厚いため、沈下率は約5%と低い。

(3) 根室半島以南太平洋沿岸

この海域には岩礁海岸域に棲息するゼニガタアザラシが分布しており、操業は小規模ではあるが、5月中旬から6月中旬にかけての出産直後の哺乳期に親子連れを捕獲していた。

操業場所は根室半島から厚岸に至る岩礁海域である。図-4にゼニガタアザラシの分布海区と推定数を示した。現在この種は天然記念物に指定され、捕獲禁止となっている。

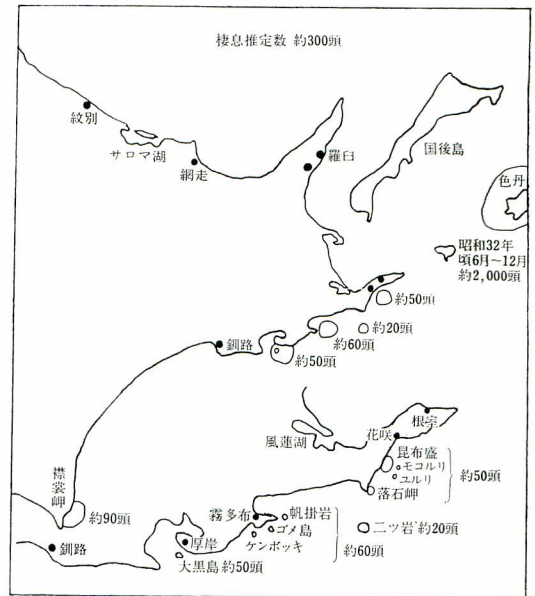


図4 ゼニガタアザラシ分布海域と棲息推定数

4 捕獲数と捕獲種内容

上記のように、操業海域は3つの海域に大別できるが現在操業している海域は(1)及び(2)のみである。(1)の北見大和堆から樺太東岸沿いの北緯 56° にいたる流氷期のオホーツク海漁場での捕獲数は(2)の沿岸海域での捕獲数を

はるかにしのいでいる。次に捕獲数の変遷並びに捕獲種構成について記する。

(1) 近年の捕獲数の変遷

① 流氷期のオホーツク海での母船式による捕獲数の変遷は下表に示すとおりである。

年	捕獲数
1969 (S. 44)	1,500頭
70 (45)	2,000ク
71 (46)	2,000ク
72 (47)	3,000ク
73 (48)	5,000ク
74 (49)	6,000ク
75 (50)	10,000ク
76 (51)	4,000ク

アザラシ製品の需要が次第に伸び、原料の確保が急務となったため、1975年までは捕獲頭数を人為的（船の大型化、操業海域の拡大）にふやしてきた。

特に注目すべきは、1970年以降樺太北知床岬より北方に漁場を求め、北方海域での捕獲量が増加していることである。1976年に捕獲頭数が減少した理由は需要上の都合により捕獲の対象をゴマフアザラシにしぼったことと、換毛期（4月～5月上旬）の自主禁漁とによる。

② 2月～4月における流氷期のオホーツク海沿岸と根室海域（サロマ湖、尾岱沼の内水面を含む）での近年の年平均捕獲数は図-2に示したようにゴマフアザラシが約200頭、クラカケアザラシが約120頭程度である。

8月～1月における秋期の水射ちでの捕獲数は図-3に示したように捕獲種はゴマフアザラシのみで約170頭程度である。

海獣業者の話によれば、これらの海域での発見数は10年前の約1/3に減少しており、過去に生棲していた海区で、現在消滅した漁場も2～3ある。

上記以外に他の漁業（トロール、底刺網等）によって混獲される年平均頭数は約100頭と推定される。

(2) 近年の捕獲種構成

流氷期のオホーツク海での母船式によって捕獲される種類は次表のようである。

捕獲方法に種類の選択性がない場合、種別による捕獲組成はゴマフアザラシ・クラカケアザラシの2

種名	異名	比率
ゴマフアザラシ	バオイ	40.0%
クラカケアザラシ	アラハ	50.0
ワモンアザラシ	フィリー	6.0
アゴヒゲアザラシ	トンガリ	4.0

種類で全体の約90%を、ワモンアザラシ・アゴヒゲアザラシの2種類で約10%を占め、この比率は現在においても変わらない。

しかし、ゴマフアザラシとクラカケアザラシについて比較すると、過去の資料ではゴマフアザラシが60.0%、クラカケアザラシが30.0%であったが、近年はこの比率がゴマフアザラシ40.0%、クラカケアザラシ50.0%と逆転している。この2種類の捕獲組成の変化は操業海域の拡大による北方漁場にクラカケアザラシの分布が多いことを物語っている。

原皮の種別需要度はゴマフアザラシが最も高いため、1976年の操業は主としてゴマフアザラシとその当才獣を対象とした、選択性を持った捕獲がおこなわれた。

5 アザラシの利用方法

過去においては毛皮、脂、肉、内臓とほとんど完全に利用に近いものであった。現在では、脂肪は皮革油として、肉、内臓のごく一部は養殖ミンクの餌料に利用されているのみで、主とした利用は毛皮のみと言って過言ではない。毛皮はなめされた後、幼獣の毛皮はコート類に、その他は民芸品的細工物、袋物に加工され、ごく品質の悪い毛皮はスキーマのシールに用いられる。

鞣し方法は明鞣と油鞣しがあり、高級製品は後者の鞣しによる。製品化されたものでコート類は別として、他

種名	平均坪数 (1坪約30cm平方)
ゴマフアザラシ	15坪
クラカケアザラシ	13
ワモンアザラシ	13
アゴヒゲアザラシ	25

近年の価格 (1坪)

特級品	1,000円
1級品	800円
2級品	500円
3級品	坪数に関係なく毛皮1枚 1,000円
当才獣	1頭 10,000円



図5 アザラシ製品の一部

のものはほとんど北海道観光特産の土産品として販売されている。アザラシ製品の種類の一部を図5に示す。

一次生産者から毛皮加工業者にひきとられる流氷期の毛皮の種類別平均坪数と1坪平均価格は前表のとおりである。なお、坪数は鞣しあがった時点で出す。

毛皮の等級づけ基準とその用途を次頁の表に示す。

6 輸入毛皮

外国産のアザラシ毛皮の輸入は主として北欧（グリー

ンランド）から日魯毛皮株式会社、木下商事、小林桂株式会社の三社がおこなっている。日魯毛皮KK、木下商事は油鞣されたもの、小林桂株式会社は生皮の状態で購入し、製品化されたものは輸入していない。輸入枚数は年によって多少の変動はあるが、三社平均2,000~5,000枚程度である。

日魯毛皮株式会社は1枚30,000円程度のコート材料と15,000円程度のバック材料を、木下商事は30,000円程度

等級	基準	用途
特級品	当才獣（3月中旬に生れ、3月下旬から7月中旬に捕獲されたもの） 冠毛期（6月上旬から7月中旬）に捕獲されたもの	コート、ハンドバック、サイフ、ゾウリ等
1級品	毛皮があまり黄変色してないもの（主として秋期から春期にかけて捕獲されたもの）	サイフ、ベルト等
2級品	毛皮が黄変色したもの、又班紋（模様）が鮮明でないもの	スキ어의シール
3級品（革用）	毛ぬけ等があり、あきらかに毛の質が悪いもの	部分的に毛のある所を使用してヌイグルミ等

のコート材料と10,000円程度の小物用材料を、小林桂株式会社は1枚5,000円程度のヌイグルミ及びシール用材料を輸入している。

これら輸入された原皮は東京及び京都で、コート、ハンドバック、ベルト等のアザラシ製品に加工されている。

輸入種はブルーバック、ゴマフ、ワモン、ゴマスとクラカケの中間種の4種である。

7 オホーツク海及び北海道東海域の棲息種と推定資源量並びに保護状態について

オホーツク海及び北海道東海域の棲息種は下記の5種類である。アザラシ資源量の推定は各報告の差が大きすぎるため、その信頼性について確信のもてる段階ではないと思われる。

参考までに IVASHIN *et al.* (1973)「海獣便覧」を引用してその推定量とソ連における捕獲並びに保護の現状を説明すると下表のようである。

種名	推定棲息数(海域)	年間捕獲数	保護の程度
ゴマフアザラシ類	60,000以上 オホーツク海	8,000(海上捕獲)	1971年より捕獲制限 海上 オホーツク海 4,000 ベーリング海 5,000 沿岸 オホーツク海 5,000 ベーリング海 2,200
	100,000~200,000 東太平洋 50,000~100,000 西太平洋 50,000~100,000 東大西洋	— } 数千頭 (ソ連を除く)	— ノルウェーでは5月1日から8月31日(繁殖期)の間捕獲禁止
ワモンアザラシ	1,000,000~1,200,000 オホーツク海、ベーリング海	70,000	海上、沿岸捕獲制限 オホーツク海 34,000 ベーリング海 36,000
クラカケアザラシ	180,000~200,000 オホーツク海、ベーリング海	17,000	海上捕獲制限 オホーツク海 7,000 ベーリング海 3,000
アゴヒゲアザラシ	180,000 オホーツク海	9,000	1970年よりオホーツク海、ベーリング海での海上捕獲禁止 沿岸捕獲制限 オホーツク海 5,000 ベーリング海 3,000
ゼニガタアザラシ	2,500 千島、道東海域		1969年からソ連は捕獲禁止

ソ連では、捕獲数は推定棲息数の約1割という制限をもうけている。

8 トド漁業

(1) トドの捕獲

トドを対象とした専業漁業は毛皮、肉の価値が低いため経営的に成立しない。トドの来遊期にオホーツク

沿岸の関係漁協は漁場荒廃及び定置網等の破損を防ぐための天敵駆除として奨励金又は依頼金を出して専門ハンターに射殺を依頼している。これらによって捕獲されたトドの一部の肉が利用されているにすぎない。

(2) 法的処置

地元公安委員会（警察）では鳥獣保護及び狩猟に関する法律の適用範囲外の有害鳥獣駆除の名目で許可を出す。火薬購入は、トド駆除の依頼の地元漁協の依頼書によって公安委員会が許可を出す。

(3) 奨励金又は依頼金を出している漁協

依頼金	猿払漁協	約	50万円
奨励金	羅臼漁協	1頭につき	1,500円
〃	厚岸漁協	〃	4,000円

(4) トドの利用

① 肉

イ 食用缶詰め用

1974年 QP缶詰が購入 18トン（精肉として）

1975年 〃 20トン（ 〃 ）

（精肉とした場合 1kg50円～150円）

大型トドは体重にして1～1.2トンであるが、精肉とした場合の止留は1/3。したがって20トンの精肉をとるのには約60～70頭のトドが必要となる。

ロ ミンクの餌

需要は少ない。1974年には餌として使用されたが、1975年には需要がなかった。ミンクの餌用として精肉した場合は1kg30円～60円。

② 装飾品

頭部のみを剥製したものがある。

(5) トドの分布回遊並びに資源状態

トドの分布はベーリング海から南方の海域であり、東部太平洋ではカリフォルニア沿岸、西部太平洋では三陸沿岸及び日本海の北部海域に分布する。

資源量は（SCHETTER, 1958）6万～15万頭と言われているが、現在では何ら捕獲されることなく自然の状態のまま保護されているため、もう少し多いと考えられる。

北海道沿岸へのトドの来遊は11月初旬に始まり、6月初旬に終る。最も来遊量の多い時期は4月である。

樺太東海岸から猿払沿岸への来遊は11月初旬であり、千島から知床沿岸への来遊は多少遅く11月中旬である。

オホーツク海沿岸ではほとんどが8月であり、太平洋沿岸ではほとんど早となっている。

トドの回遊南限は噴火湾であり、ここでは8月、早が混合している。日本では北海道沿岸への来遊時期のみ食害でさわりではいるが、来遊経路、来遊頭数及び食性並びにその食害の程度についてはなんら調査されていないの

が現状である。

9 あとがき

米国、ソ連の間で1970年からおこなわれてきた「ベーリング海及びチュクチ海におけるアザラシ並びにセイウチに関する非公式会合」では調査協力について次のような勧告がなされている。

(1) アザラシに関する最近の情報の交換は毎年の北太平洋おっとせい国際会議の後におこなう。

(2) 各国はできるだけアザラシ並びにセイウチに関する年間の全捕獲数を提供する。

(3) 将来の会合では次の項目について討議される。

① 年令、性成熟年令および再生産状況を決定する方法ならびに技術

② 資源管理に関する情報を含む研究資料

③ 技術の標準化

④ 資料の交換

⑤ アザラシおよびセイウチの保存を保証するためにおこなわれる国家間の合意

また、1972年にモスクワを訪れた米国のニクソン大統領が環境保護の分野で、米国、ソ連2国間協力を同意し、海産哺乳動物についていくつかの協力計画が原則的に承認されている。

上記の問題を行政的並びに研究的に対処すべき態勢を米国、カナダ、ソ連はすでに備え、かつ、活動している。

米国…… National Marine Fisheries Service のノースウエストセンターの傘下に海獣部があり、その海獣資源研究の拠点はシアトルにある。現在の研究計画は下記のようなものである。

① オットセイ陸上研究

イ セントポール島商業猟獲調査計画

ロ セントジョージ島およびサンミゲル島特別調査計画

② オットセイ海上研究

③ アザラシ研究

④ クジラ研究

ソ連…… モスクワの VNIRO に海獣研究所があり、その内部構成はオットセイ、セイウチ、アザラシ、クジラの4部門からなっており、実質的研究は各 TINRO でおこなわれている。

カナダ…… 多量のアザラシ資源をもつカナダでは、この種の研究が盛んであり、モントリオールにある北極生物学研究の主力は海獣類の研究者である。一方、わが国におけるアザラシ資源研究組織は弱体と

いうよりむしろ無にひとしい。国立水産研究所の中にアザラシ類を研究する場所も予算も人員もない現状で、今

後の国際的情勢に対処できるかどうか危惧の感をいたく次第である。(吉田主基)

大西洋からのシロカジキ *Makaira indica* の漁獲記録

高度回遊性魚種として広範な分布域を持つマグロ、カジキ類であるが、それらの種が通常分布すると考えられている海域から大きく隔った水域からも、稀にその種の出現の記録が得られることがある。

マグロ類については、北太平洋を主要な分布域とするクロマグロが、東部インド洋で漁獲された記録——焼津魚市場に水揚げされた際に魚種確認が行われた (NAKA-MURA & WARASHINA 1965) ——があり、また、カジキ類では、インド・太平洋を分布域とするシロカジキについて、大西洋から (赤道海域を中心に) もその出現を示唆する少数の記録が報告されている (上柳他、1970)。

このように、稀な現象として、シロカジキのインド洋

から大西洋への一時的な回遊の可能性は考えられるところであり、その確認の機会がもたれていたが、下記のように、大西洋ではえなわ操業船により本種が1尾漁獲され、昨年8月に焼津魚市場に水揚げされた際、筆者によりシロカジキと確認された。

船名、第28良栄丸；漁獲月日、1975年12月31日；漁獲位置、32°—03' N、21°—42' W (ラス沖漁場)；漁獲水温、18°—19°C；漁獲、シロカジキ1尾、91 kg (同時にメバチ8尾漁獲)。

なお、今回のシロカジキの大西洋出現記録は、既往の記録——赤道を中心としたほぼ20° N~20° Sの範囲——より更に北方の水域からのものであった。従来想定を裏付け、さらに新たな知見を加えた、大西洋からのシロカジキの出現、分布の確証記録として報告する。

(薬科侑生)

ク ロ ニ カ

- 1. 2 水産海洋研究会 (国際海洋学会出席報告) 於東京 山中(郎)技官。
- 1. 6 捕鯨対策協議会 於東京 福田、大隅両技官。林技官ローマ (FAO) より帰所 (49. 9. 28~)。日鮭連成田氏新洋丸による さけ・ます調査打合わせに来所。
- 1. 10 デモスーE システム講習会 於静岡 永井技官 (~14)。日加マグロ漁業入域交渉 (水産庁小野課長補佐、日カツ連吉崎専務他1名、カナダ側でクロマグロの漁獲量を勘案しながら200マイル水域内入域隻数が決められることになった) 於オタワ 久米技官 (~1. 16)。
- 1. 12 宮城県女川遠洋漁業協同組合講演会 (北太平洋ビンナガの魚群構造) 於女川 森田(祥)、塩浜両技官。京都府水産課来所。さけ・ます調査船連絡会議並びに研究会 於函館 藪田、佐野、高木、大迫、伊藤(準)各技官 (~13)。
- 1. 14 照洋丸調査打合わせ (照洋丸インド洋より帰港

51. 10. 2~1. 14) 於東京 森田(二)技官。

- 1. 17 GSK 底魚北部ブロック会議 於八戸 若林技官 (~18)。管理事務担当者研修 於八王子 角田技官 (~21)。水産庁研究課と北大練習船による さけ・ます調査につき打合わせ 於東京 藪田技官。
- 1. 20 仏領ギニアのエビ資源調査打合わせ 於東京 池田、畑中両技官。放射化分析打合わせ (於農技研) 加藤技官。京大中村泉氏来所 (照洋丸標本調査) (~22)。
- 1. 24 ICNAF, ICSEAF およびニュージーランド漁場の資源調査打合わせ 於戸畑(日水)、下関 (大洋) 長崎、永井両技官 (~27)。研究管理者セミナー 於東京 水戸技官 (~27)。昭和52年度集計業務及び電算機利用実行計画打合わせに農林省電算機室斎藤、猪島、杉浦各技官来所。
- 1. 25 開発センター佐藤氏南方トロール関係打合わせに来所。
- 1. 27 俊鷹丸南西海域調査のため出港 (2. 22)。官房営膳時田専門官、和田事務官来所。
- 1. 29 俊鷹丸岸壁工事その他打合わせ 於東京 大山

- 総務部長。
1. 31 捕鯨対策委員会 於東京 福田、大隅両技官 (~2.2)。
アルゼンチン、パタゴニア沖底魚資源調査打合わせ 於東京 佐藤技官。
幹部研修 於東京 大山総務部長 (~6)。
 2. 1 北洋カニ漁業の情況聴取 於東京 竹下技官 (~2)。
 2. 2 仏領ギアナ沖エビトロール漁業に関する対 E C 交渉事前協議 於東京 池田、佐藤両技官。
東海村原研でさけ試料の放射化分析 加藤技官 (~4)。
昭和51年度マグロ漁業研究協議会 (200 裡水域問題に関連した多くの討議が行われた) 於東京 福田所長、水戸、上柳、山中(郎)、山中(一)、宇都、行縄、森田(二)、米盛、本間、新宮、久田、鈴木、木川、森田(祥)、久米、塩浜、森田(安)、林、薬科各技官 (~4)。
 2. 4 技会企画連絡室長会議 於東京 水戸企連室長 (~5)。
日ソ漁委提出資料水産庁へ(官用車) 岡崎技官。
北大及び開発センターとさけ・ます調査打合わせ 於東京 佐野技官 (~5)。
オットセイ年次会議打合わせ 於東京 吉田技官。
ブループリント検討会 於東京 上柳、本間、池田、高橋、佐藤各技官 (~5)。
 2. 5 ニシン作業委員会 於東京 森田(祥)技官。
 2. 7 日ソ準備会議打合わせ 於東京 池田、森田(祥)両技官 (~8)。
日本海マス調査会議 於新潟 待鳥技官 (~10)。
日水研石高、早川両事務官来所 (~8)。
IATTC 研究員 Dr. R. ALLEN, Mr. H. KRISTJONSON, 水産庁石原技官来所 (~8)。
 2. 8 ウップホール水産研究所 Dr. W. EDWARD 来所。
開発センターはえなわ分科会 於東京 薬科、久米両技官、かつお分科会 木川技官。
京大中村泉氏来所(照洋丸標本調査) (~9)。
日ソカニ漁業交渉国内検討会 於東京 竹下技官 (~9)。
開発センターまき網新漁場企業化調査分科会 於東京 山中(一)、本間両技官。
 2. 9 木部崎東海水研所長来所 (~10)。
人事院給与局高林係長外1名、官房秘書課小野事務官打合わせに来所。
日ソ漁業委員会準備国内検討会 於東京 佐野高木両技官 (~10)。
 2. 15 技会、全場所長会議 於東京 福田所長。
 2. 16 漁業動向検討会 於静岡市 大山部長。
開発センター遠洋トロール資源分科会 於東京 池田、佐藤、畑中各技官。
 2. 18 開発センターオキアミ分科会 於東京 川崎、大隅両技官 (~19)。
統計情報協議会 於遠水研 関東農政局静岡統計大場所長外来所。
 2. 19 インド留学生 Dr. PILLAI 研修のため来所。
東北水研焼津分室田中技官来所。
 2. 21 技会連調課熊本係長外1名特別研究等打合わせに来所。
所長会議 於東京 福田所長、水戸企連画室長 (~22)。
 2. 24 東海村原研でさけ試料分析 加藤技官 (~22)。
東海水研土井技官、真珠研矢野技官談話会講演のため来所。
庶務部会 於稲取 森事務官 (~25)。
昭和52年度開洋丸運航計画打合わせ 於東京 水戸、川崎、畑中各技官 (~25)。
市場調査 於焼津 西川技官 (~3.2)。
 2. 25 北洋母船協議会とさけ・ます資源問題につき懇談 於東京 佐野、大迫、伊藤(準)各技官。
東海水研山崎総務部長、柴会計課長来所 (~26)。
淡水研日向事務官来所。
 2. 26 日本水産学会中部支部例会 於清水 山中(郎) 森田(二)両技官。
CECAF 第5回本会議 於ロメ(トーゴ) 佐藤技官 (~3.14)。
岩手教委齊藤課長補佐さけ・ます調査打合わせに来所。
 2. 27 水産資源保護協会巡回教室 於沖縄 森田(安)技官 (~3.5)。
 2. 28 ニシンに関する研究打合わせ 於北水研 森田(祥)技官 (~3.5)。
資源海洋部長会議 於東京 藪田、上柳、池田

- 山中(郎)各技官(～3.2)。
3. 1 農林官房樋口監督官来所(～3)。
共済組合事務打合わせ 於静岡 森、若林(恵)両事務官。
3. 2 昭和51年度カツオマグロ漁業研究会 於焼津 林、山中(一)、行縄、森田(二)各技官。
用度部会 於稲取 増田事務官(～3)。
3. 3 ミクロネシア調査打合わせ 於東京 林技官。
3. 4 北洋母船協議会と沖合に分布するベニザケについての研究会 於日本平 北洋資源部員。
3. 5 水産庁須田参事官さけ・ます別枠研究打合わせに来所。
3. 7 GSK 委員会 於東京 森田(祥)(～8)、森田(二)、新宮、伊藤(準)各技官。
ICES/ICNAF 浮魚資源変動シンポジウムにつき打合わせ 於東京 林、森田(祥)両技官。
技会企画科長会議 於東京 水戸企連室長(～8)。
オットセイ年次会議打合わせ 於東京 長崎、吉田両技官(～8)。
3. 8 三崎遠洋漁業研究会 於三崎 米盛、本間、林各技官。
池田長三郎氏(北洋はえなわ、さし網協会専務)統計資料検討のため来所。
3. 9 捕鯨対策協議会科学部会 於東京 福田、大隅両技官。
3. 10 大洋漁業北洋部宮川氏外4名さけ・ます生物資料について来所(～11)。
さけ・ます、ニシン資源問題につき日ソ漁業委日本側委員に説明 於東京 佐野、森田(祥)両技官(～11)。
水研部課長会議 於東京 大山部長、清水、二村両課長(～11)。
3. 11 日ソ漁委提出資料水産庁へ(官用車)伊藤(外)技官。
市場調査 於東京 鈴木、久田両技官。
南大洋生物資源検討会 於ロンドン 大山部長(～20)。
3. 12 日ソ漁業交渉 於モスクワ 池田、竹下両技官(～4.17)。
3. 13 オットセイ年次会議 於東京 長崎、吉田両技官(～23)。
3. 14 さけ・ます大規模培養技術別枠研究設計会議 於東京 藪田、佐野、高木、川崎各技官。
3. 15 水産庁漁船課山下技官 俊鷹丸業務打合わせに来所。
3. 16 開発センター鈴木春彦氏来所。
三官庁海洋連絡会 於東京 山中(郎)技官。
ミクロネシア調査打合わせ 於塩釜 林技官(～18)。
3. 17 技会整備課山崎係長外1名来所。
開発センター奈須敬二氏来所。
行政管理庁関根技官焼津分室視察。
日ソ漁業委員会(ニシンに関する討議) 於東京 森田(祥)技官(～23)。
南氷洋オキアミ特調費研究報告会 於東京 山中(郎)、大隅両技官。
3. 18 マグロ資源解析計算 於東京 本間技官。
PNG 漁業資源調査報告会 於東京 水戸技官。
東海水研岡田啓介技官魚探調査打合わせに来所。
日ソ漁業委員会 於東京 佐野、高木両技官(～30)。
3. 22 ホノルル水研所長 Mr. SHOMURA マグロ、カジキ資源研究打合わせに来所(～23)。
マグロ養殖試験結果報告会(参加機関:近大、東海大、鹿児島水試、高知水試、秦東製鋼、遠水研) 於遠水研。
北西太平洋海域の海洋調査打合わせ 於吉見川崎技官(～24)。
技会国際協力班大塚係長業務打合わせに来所。
3. 23 共済静岡支部運営委員会 於静岡市 清水課長、桜井事務官。
直研連会議 於東京 福田所長。
市場調査 於焼津 久田技官(～29)。
開洋丸帰港(河野技官51.12.5～)出迎えおよび今後の調査打合わせ 於東京 水戸企連室長。
3. 24 芙蓉情報センター土屋氏来所。
広島大学林教授来所。
3. 25 開洋丸の標本魚、調査資料の受取りおよび事後処理に関する打合わせ 於東京 佐藤技官。
3. 26 東北大学鶴田義成氏来所。
3. 27 南方トロール関係魚種の調査に関する打合わせ 於函館 畑中技官(～31)。
3. 28 ビンナガ研究会議 於静岡水試 米盛、本間、久田、木川、森田(祥)、塩浜、森田(安)、林、薬科各技官。
オットセイ国際会議ソ連代表 Dr. V. V.

KIDANOV, Dr. ZEMSKY, Dr. KUZIN, Mr.

SIMBRIEV, カナダ代表 Mr. E. B. YOUNG

(~29) 来所。

官房管轄奥村専門官俊鷹丸岸壁工事検査に来所。

陽光丸森田一航来所。

3. 29 ヘイズ・アレン・カンパニー Mr. J. K.

LAURENCE 来所。

九大木村清朗氏来所。

3. 30 放射化分析打合わせ 於東京 待鳥、加藤両技官 (~31)。

照洋丸調査機器打合わせ 於東京 行縄技官

(~31)。

開洋丸高橋船長、中山一航、久保田次一航海山調査報告のため来所。

東海水研三幣、日下部両事務官金庫検査のため来所。

北水研金丸技官北底関係打合わせに来所。

南大洋生物資源調査検討会 於開発センター 大山部長。

3. 31 Antarctic Treaty Consultation Meeting

報告会 於東京 山中(郎)、川崎両技官。

北洋調査打合わせ 於東京 角田船長。

Dr. DAILEY 他1名来所。

刊 行 物 ニ ュ ー ス

OKUTANI, T., Y. SATAKE, S. OHSUMI and T. KAWAKAMI.....Squid eaten by sperm whales caught off Joban district, Japan, during January-February, 1976. Bull. Tokai Reg. Fish. Res. Lab., No. 87 (67~113) 1976年10月。

高木健治.....サケ・マス調査用流網によって得られた若干の知見 北洋資源研究評議会研究会報 第5号 (97~104) 1976年12月。

薬科衛生.....焼津入港船の稼動状況(昭和51年8~10月分) 漁況概況 日鯉連 1976年12月。

水産庁.....1976年におけるさけ・ますの標識放流及び標識魚の再捕の記録(1~13) 1977年1月。

水産庁.....1974年、1975年及び1976年のさけ・ます調査船の調査記録〔II〕 海洋観測資料(1~147) 1977年2月。

遠洋水研.....昭和51年度マグロ資源調査研究経過報告(1~41) 1977年2月。

遠洋水研.....マグロ資源調査実施状況一覧表(1~14) 1977年2月。

遠洋水研.....第2若鳥丸による北洋底魚生物調査報告(1973年)(1~142) 1977年2月。

遠洋水研.....俊鷹丸による北洋底魚生物調査報告(1975年)(1~96) 1977年2月。

遠洋水研.....俊鷹丸による北洋底魚生物調査報告(1976年)(1~87) 1977年2月。

遠洋水研北洋資源部.....さけ・ますの資源状態に関する資料(1977年度)(1~245) 1977年2月。

水産庁開洋丸.....昭和51年度開洋丸調査航海報告書(速報)(中南部太平洋海山) 1977年3月。

遠洋水産研究所 研究報告 第14号 1976年12月

MASAKI, Y.Biological studies on the North Pacific sei whale (1~104)。

山中一郎.....“漁海況論”の情報理論による検討-II マグロ漁況予想について(105~121)。

山中 一・行縄茂理.....Hunter Bank 付近における海洋特性についての一考察(123~162)。

永井達樹・須田 明.....トロール混獲物からみた夏季の東部ベーリング海における貝類相及びその環境について(163~179)。

水産海洋研究会報 第29号 1976年12月

久米 漸.....大西洋マグロ類の保存国際委員会の活動(44~45)。

本間 操.....経済水域とマグロ、カジキ類の漁獲量(45~48)。

山中 一.....照洋丸による北部アラビヤ海の浮魚魚群量の調査結果(48~50)。

日ソ漁業委員会提出資料 1977年3月

水産庁.....さけ・ますに関する生物学的統計資料(1976年 公海)(1~5) 1977年1月。

水産庁.....さけに関する生物学的統計資料(1975年・北海道沿岸)(1~9) 1977年1月。

水産庁.....さけ・ます降下稚魚の標識放流及び標識魚の再捕の記録(1976年)(1~9) 1977年1月。

水産庁.....日本沿岸のさけ・ますに関する各種統計資料(1975年度)(1~2) 1977年1月。

漁業資源研究会議報 第19号 1977年3月

第14回漁業資源研究会議シンポジウム ——漁業資源の有効利用——

山中一郎…………… I. 趣旨説明と展望 (3~5)。

大隅清治…………… II-1. 資源管理の基準としての MSY 概念 (23~26)。

森田 祥…………… II-5. 単一資源を異種漁業が利用する場合の有効概念と研究の役割 —— 有効性の統一とそれを保証する構造をさぐる試論 —— (89~96)。

YAMANAKA, H., Y. NISHIGAWA and J. MORITA …………… Summary report on cruise of the R/V Shoyo Maru in the North Arabian Sea. (1~47) 10P/TECH/76/11 FAO 1976年9月。

オットセイ研究室…………… Japanese Pelagic Investigation on Fur Seals, 1976. (1~46) 1977年2月。

オットセイ研究室…………… Report on the Quality of Gray Pup's. Fur. (1~5) 1977年2月。

YOSHIDA, K. …………… Comparison of Japan, Canada, U.S.A. and U.S.S.R. analyses of 48 genital tracts, by specimen field number. (1~2) 1977年2月。

MATSUURA, S. and K. TAKESHITA …………… Molting and growth of the laboratory-reared king crab, *Paralithodes camtschatica* (TILESIIUS). Report Fish. Res. Lab. Kyushu Univ., No. 3, (1~14) 1976。

人事のうごき

1. 7 命 遠水研浮魚資源部主任研究官
(FAO派遣職員から職務復帰)

技 林 繁 一

3. 4 退職 遠水研総務部庶務課図書係長

事 山 本 たつえ

3. 22 命 遠水研俊鷹丸通信長

(水産庁東光丸二等通信士)

技 中 里 正 光

命 水産庁東光丸二等通信士

(遠水研俊鷹丸通信長)

技 吉 野 忠 興

それでも地球は動いている

(編集後記)

前号で200海里問題に触れたが、その後の事態の移り変りの激しさはどうだろう。本年5月から開かれる予定の国連海洋法会議の結論を待たずに、我が国が200海里宣言を、こんなにも早い時期に、考えざるを得なくなろうとは、ほとんどの人が予想もしていなかったに違いない。

今後も事態は急激に推移して、やがて新しい漁業秩序が成立することになるだろう。しかし、こうした新しい秩序が、いつ、どこで、どんな形で具現し、それがどの位の期間安定して続くかとなると、正直なところ予測できそうもない。

当遠水研の活動は、我が国の漁業をめぐる国際情勢に強く影響されるので、現在の情況は、将来の研究の方向を見極める上では非常に困難なものだと言わざるを得ない。だからと言って、手を拱いて事態を傍観しているわけにはゆかない。今後の研究目標の設定やその遂行に当って、どんなことが考えられるであろうか。

当然のことながら、重点的に研究しなければならない魚種や漁業種、それに対象とする海域が多少変わってくるだろう。さらに、研究を進めてゆく体制も変化が予想され、他の水研や関連研究機関とは、今まで以上に密接な

協力研究が進められてゆくことになろう。研究の手法は急に変るとは思えないが、従来の手法の再検討や結果の再吟味が行われるだろう。

国際問題に研究者が対応する場合には、いわゆる国益が絡んでくるだけに苦慮することが多い。会議や交渉に出席してその衝に当る研究者の苦勞もさることながら、準備のために長い時間と多くの労力を投入した関係研究者達の努力も大変なものである。これからの漁業が資源管理型を指向し、一方、発展途上国の経済水域内での我が国漁業が技術援助や経済協力と引替えに行われそうだという情勢になると、研究者の国際対応の機会はずっと多くなるだろう。国際対応と研究活動をどう調整してゆくかは、大きな問題である。また一方では、国際対応にはそれなりの経験と知識が要求されるので、後継者の育成ということも考えておかねばなるまい。

ここ数年「水産を取り巻く環境は厳しい」と言われ続けてきたが、ここに来てその厳しさは枕詞的ではなく、実感となった。遠水研も転機を迎えつつあるという感が深い。
(水戸記)

昭和52年4月20日発行

編 集 企 画 連 絡 室

発 行 水産庁遠洋水産研究所

〒424 静岡県清水市折戸1000

電 話 <0543>34-0715